

舞鶴帯における背弧盆性海洋地殻と大陸地殻の混合過程

早坂康隆* (広島大)

Mixing process of oceanic crust of BAB spectrum and continental crust in the Maizuru belt, SW Japan

Yasutaka Hayasaka* (Hiroshima Univ.)

舞鶴帯の構成：舞鶴帯は模式地の舞鶴-大江地域において北帯、中帯、南帯に三分される。北帯は圧碎花崗岩類を主とし、変斑れい岩-ドレライトや少量の泥質片麻岩を伴い、南帯は変斑れい岩-ドレライト主体で、圧碎花崗岩を伴う火成岩複合岩体からなる。その間に存在する中帯には主としてペルム系舞鶴層群と、これを不整合に覆うトリ阿斯系夜久野層群、難破江層群が分布し、変斑れい岩や圧碎花崗岩などのレンズ状小岩体がテクトニックに「貫入」している。舞鶴帯を構成する変斑れい岩-ドレライトや圧碎花崗岩類などは、一括して夜久野岩類と呼ばれている。

夜久野岩類の起源と年代：南帯の夜久野岩類は、前期石炭紀の約 340 Ma に形成された海洋プレート内にペルム紀前・中期の 290-270 Ma に形成・成長した海洋内島弧地殻起源である（早坂ほか, 1996）が、石炭紀の海洋地殻の大部分は背弧盆起源である（Suda et al., 2014）。北帯は模式地の舞鶴-大江地域で断層によって東部の舞鶴花崗岩（Ca. 280-240 Ma）と西部の桑飼岩体（Ca. 440-400 Ma, 290 Ma）に分けられる（池田・早坂, 1994; Fujii et al., 2008; Tsutsumi et al., 2014）。これらを近隣の大陸地殻と比較すると、桑飼岩体はロシア沿海

州のハンカ地塊に、舞鶴花崗岩は飛驒帯のペルム紀-ジュラ紀花崗岩類と共に、北朝鮮北東端の咸北帯の豆満江複合岩体に対比される。桑飼複合岩体の西方延長は岡山県久米地域の取首山岩体（Ca. 490-300 Ma; 原田ほか, 2015）である。中帯の夜久野岩類は、大部分 290-270 Ma の背弧盆起源の変斑れい岩（小出, 1986）や花崗岩類からなるが、津和野地域には新太古代-古原生代、およびシルル・デボン紀の花崗岩類やメタコーツァイトなどからなる大陸クラトン起源の津和野コンプレックスが伴われる。（木村ほか, 2019; Kimura et al., 2021）。

海洋地殻と大陸地殻の混合プロセス：中帯の西方延長である福山市北部の山野層群などに厚さ 50 m 以上の半遠洋性赤色珪質粘土岩が伴われることから、中帯の起源となった背弧盆は現在の四国海盆ほどの広さになって海洋性の地殻を伴っていたと推定される。そこに大陸クラトンの断片が伴われるのは、日本海のように、大陸縁内で形成・拡大する際に大和堆のような大陸地殻の断片を取り残した背弧盆が収束したためと考えられる。その後舞鶴帯は幅の広い右横ずれ運動によってメランジュ化した。

Keywords: Maizuru belt, Yakuno complex, Tsuwano complex, closure of back-arc basin

*Corresponding author: hayasaka@hiroshima-u.ac.jp